

中学校受験と通学時間、学業成績、子どものQOLに関する

日本のパネルデータを使った実証分析

佐藤大晃、杉田壮一郎、大鹿桃子、中室牧子

2026年5月24日

<要旨>

本研究の目的は、通学時間の増加が子どもの学力に与える効果を推定するものである。日本において高まってきている中学校受験を背景として、この効果を推定するために、中学進学前後を含む2時点のパネルデータを使用し、中学校受験をした上で、公立中学校へ進学した子どもと国立・私立・中高一貫校の中学校へ進学した子どもを対象として、子ども個人の固定効果等を制御した上で推定を行った。推定の結果、通学時間が10分増加することで算数・数学については -0.12 標準偏差と統計的に有意な負の結果がみられた。一方で、国語においてはそのような結果は確認されなかった。このメカニズムを確認するため、因果媒介分析を行ったところ、通学時間と総勉強時間がトレードオフになっていることが示唆された。また、通学時間の増加が子どものQOLに与える効果を検証したところ、身体的健康に負の関係がみられ、テストスコアだけでなく、通学疲労の影響も示唆される。このことから、子どもの学校選択においては、通学時間も考慮する必要性が示唆される。